

「いまや一般的に、この『赤旗』はかなりの購読数もあり、私の認識としては、必ずしも共産党員とか、そういった人たちだけが購読するものではないと認識しています」「保守本流を歩いてこられた高名な政治家の方も登場しておられます」

これは、滋賀県米原市の平尾道雄市長の議会答弁です（ことし3月6日）。平尾市長は、昨年11月8日付本紙のインタビューに登場、「戦争は

## 「進化」する共同の新聞

しない』『原発はいらない』という二つのことは、市民の命を守る使命に立つ行政の長として、言い続けていきたい」と語りました。この「赤旗」取材に応じた経緯を問われた市長の答弁が、冒頭紹介した発言です。実際、保守政治家の

「赤旗」への登場はこれまで珍しくありません。2009年には、「赤旗」を長年の「宿敵」とよぶ野中広務・元自民党幹事長が本紙インタビュに  
 応じ、平和への思いを熱く語りました（6月27日付）。「いまの時代がそうさせる」と「赤旗」登場

の動機を語った野中氏。「宿敵」の登場は、「目を疑った」「ものすごい発言だ」など大反響をよび、衝撃を広げました。13年には古賀誠・元自民党幹事長が日曜版6月2日号で、「96条改憲に大反対」と発言、テレビ、新聞がいつせいにとりあげ、大注目を集めました。



弁護士で元最高裁判事の浜田邦夫さんが登場した10月8日付日刊紙

戦争法に反対するた  
 かのなかでは、元内閣法制局長官、元最高裁判事といった権力の中核にいた人々が、次々登場、思いを語りました。立憲主義、民主主義を破壊する安倍政権の独裁的暴走のもと、国民共同の新聞は「進化」を続けていま